旅行記

中禪寺に行く道

粒木つね

一足毎に右手の崖が高く左手の谷は深くなつて行つた。着物の濡れた裾をハタ〳〵と脛に吹付けてゐた風もだん〳〵弱つて道は次第に山懷に包まれた靜寂の中に這入つて行くのである。耳をすますと山陰を吹廻つて行く嵐の音が谷川の響に交つて聞える。

絶壁の黑い岩面の襞から又道邊の濡れた小草の葉陰から次第に暗が這出して狹い谷合の道はもう暮れかゝつた。「あゝ今日は遂々一日日の目を見ずに了つた」と重い足を引づり乍ら嘆息した時「まあ一寸」と友は突然叫んだ。友の白い細い指の方向に雨に洗はれた草山があつた。峨々たる紫褐色の岩山の群の中に、稍黃味を帶びた柔な鮮明な綠と、平穩かな丸い線とが一層懷しく目立つた。その草山の嶺に一所、今夕日が薄紅い丸い班點を投げてゐた。それを見た私の心は、白羽の鳥でも胸の上に飛んで來たかの樣に急に活々と明るく嬉しくなつた。あの東照宮の巨大な杉の並木と朱塗の樓とは、クッキリ澄渡つた青空を背景としてゞなければ寧ろシト〳〵と注ぐ小雨の中に見た方がなど慰めては見たものゝ、僅に二日の旅のせめて明日許りも晴にしたいと祈つてゐたので。そこは「幸の橋」の上であつた。兩方から廻つた崖合に細い鐵棒で組まれた釣橋の青く赤く錆を吹いた欄干から見下すと、足元から白雲が湧立つ樣に水が激して泡を吹いてゐる。白い〳〵盛んな泡！大な岩の陰に紛れ込んだ水は透る樣なサフアイア色して靜かに小さな渦を卷いてゐる。私は未だ嘗て此の樣に純な水の色は見なかつた。その眞白な奔流と今私達が昇つて來た道とが寄り添ふて落込んで行く方向に山が一所切れて、其の切目から覗いた空が薄い水色に晴れてゐた。私は何だか其の明るい空の方に懷

しい東京がある樣な氣がした。その下を通り乍ら仰ぎ見た時にはたゞ赫黑く見えた長い高い絶壁をこゝから斜に遠く望み見ると、まるで屏風繪に塗られた綠青の樣な光を放つてゐた。何とかいふ苔の作用に違ない。かうした一足毎に變化を見せて行く高山の眺めが私達を喜ばせた。私達は空許り見詰め乍ら昇つた。狹い山合に垂下つて居た灰色の空が欠第に雲切れがして風にそよぐ細な樹葉の間から覗いた青空が輝く樣に美しい。團々になつて散つて行く白雲も薄紅く夕日の色を帶びて華やいで見える。一旦暮れかゝつたと思つた谷の中に急にどこともなく樂しげな光がたゞよふた。

山の上に食料やら日用品を運んで下りて來る荷馬の群に幾つとなく出逢ふた。脊にかけた蓆も蓋もシツポリ濡れたまゝ二匹三匹づゝ繫がつて女馬子の後について、崖の方に退いた私達に遠慮する樣にそつとすり拔けて行く小柄な牝馬の樣子がどことなくしほらしい。かういふ山路には牡馬は荒くて使へぬものだそうな。女馬子の素草鞋の足指が痛々しく紅く濡れて菅笠の下から垂れた鬢毛も銀の玉が滴りそうだ。私はかういふ女達を題材に取つた小說などをあれこれと思ひ出した。この馬子達は深い谷間の杉林の中に住んでゐる柚の妻や娘達だと聞いた。然し見渡した所それらしい林も見當らなかつた。一体麓の御宮を圍んでゐる杉林の立派さに比べて山深く這入つて來たこの邊は思ひの外樹木が貧しい樣に思はれた。噂に聞いた楓樹も割に少かつた。紅葉にはまた間のある——夏の名殘の疲れを見せた不興氣な綠のまゝで雜木が道の兩側に並んでゐた。所々黃櫨や山漆や思ひ出した樣に眞紅に染つたのが電燈を灯した樣に谷の薄暗を明るくしてゐた。叢に山葡萄の紫がかつた廣い葉がもの〳〵しく這纏はつてゐたがあの黑い艶かな實は見られなかつた。道は大谷川の谷と添ふたり離れたりして進んだが滔々といふ瀨の音は此の世界の唯一の不斷の響でゞもあるかの樣に絕えず谷間に反響してゐた。谷が暮れるにつれ其の水の白さが益々際立つて來た。行く〳〵谷を隔てゝ向うの黑い絕壁の面に瀧が見られた。紅葉した楓の枝を透いて細い眞白い瀧を見るのはたゞ日本畫に見る樣な優雅を感じられる許りであつた。道傍のとある茶

屋から方等の瀧と般若の瀧とを二つ並べて見る事が出來た。下の日光の町から上つて來たのか、但しは中禪寺から下りて來たのか宿屋の印のついた華美な褞袍を着た遊覽客の年老つた男女が四五人腰かけて茶を啜り乍らゆつたりした顏して暮れて行く瀧を眺め乍ら話してゐた。

「こゝが舊道です。こんな天氣ではとても駄目ですが」途中で出合ふてついて來た宿の迎への男が說明した。何やらの樹木に被はれた小堂の横手から道が別れるのである。凸凹した恐ろしい傾斜の道の一間先がもう眞黑な茂みの奥に消えてゐる。此の道の奥を進んで行つたら、あの東照宮の彫刻に見たあまのじゃくにでも出逢ひそうな。——親切だが何となく煩さいその男を私達はわざとやり過した。傘と半纏の脊に蔦屋と拔いた文字がすぐ先の樹木の茂みにかくれて了つた。

「今日の樣に一日降り暮していつともなく暮れて行くのは格別、よく晴れた日にかういふ道で一瞬々々暗くなつて行くのは心細いものでせうね」刹られた樣になつてゐる岩下を拔ける時友は云つた。こんな道なら私は眞夜中一人でも平氣で歩けますね」と私は答へた。實際滑かで傾斜の極めて緩かなその道は灯の明るい宿場に續く事を始終意識させた。話し乍ら歩くのに安易で樂しかつた。頭上には柔な青葉が被ふてゐた。左手の谷に添ふて用心の爲め木柵や鐵柵が結つてあつた。總じて日光の山は公園の中を歩いてゐる樣な感じを持たせる所が多かつた。深い山奥に續く山路の怖ろしみや奥深い冥想的な大山高山の氣分は乏しかつた。ぐるりと廻つて顏を並べてゐる峰々はどれも皆神系質に尖つた形をして岩も樹も水もあまりに整ひ過ぎて無駄は一つもない。從つて底が見え透く樣な淺い薄い感じがした。

一旦暮れかゝつたと思つた山合が何時迄も仝じ薄明を保つた——それは知らぬ間に月が昇つたのであつた谷も山も靄を透して見る樣な月光の中に浮出てゐた。何となく覺束なげな月光は妙な黄味を帶びて居た「まだすつかり暮れ切らぬせいでせうよ」と友は云つた。そうだ、この高い崖の外側にはまだ紅い夕燒の名殘が照してゐるかもしれぬ。そして裾野の村にはやつと灯がついた頃だらう。まして海に近

い東京では、案外に美しい落日で、mさんがピアノの符が讀めなくつてホッと溜息して眼を上げた頃かもしれぬ。……「オーイ」遙下の方から後れた組が呼ぶ聲がした。私達はそれに應ずる爲めに二人一所に深く息を吸込んだ。濡ふた冷い空氣が肺の底迄泌込んだ。私の聲は友の二倍も長く續いて末が細かに震ひ乍ら蒼黑い夕暮の山氣の中に消えた。私はその自分の聲の行方に耳傾けた。二人は深い〳〵沈默に落ちた。疲れが一時に出て來て急に汗の引いた後の体に冷い山の氣が刺す樣であつた。前後にはもう人影がなかつた。只時々平坦な道路の單調を破らうとてか、子供の樣に元氣な人達が近道をしては行手の藪から不意に兎の樣に飛出してはスタスタと急いて行く。その賑かなさゞめきが時々周園の沈默を破る。かうして夜道を歩き疲れて知らぬ旅宿に泊るのだといふことが何となく樂しくて伸々した心持でゆつくりと歩いた。

猶道はヒッタリと崖の根に添ひ乍ら次第に高く螺旋狀に昇つて行く。時々高い崖の上を風が過ぎて行く音がした。ハラ〳〵と樹々の雫を振落した許りで自分達には觸らずに斜に谷底へと吹下して行く。ふと見下すと谷の遠い底の方に美しく輝いて居る灯の一群があつた。暫しの間それが自分だけの幻影ではないかと疑はれた程不思議に見えた。或は日光の町の灯かもしれぬ、私達は隨分歩いた樣な氣がするがそれは急な山壁を出來るだけのろ〳〵と曲り昇つて來たからでまだ幾干の距離も距てゝ居ないのだ。

所々不意に樹陰に赤いポンヤリした—嘶の狸のお化の樣な—提灯を見てはびつくりした。それは崖に出してかけた提灯であつた。

道が稍々下り加減になつたと思ふと急に兩側の崖が遠退いて廣場に出た。其所にはまだ薄絹の樣な薄暮の光が漂ふて居た。名に聞いた白樺らしい白い細い幹が夢の樣に立ち並んで、透して見ると其の奥は眞黑な山壁である疎な網の樣な梢に白い雲の群がかゝつてゐてその間を光さやかな半月が射る樣に潛る。右手に低くなつた山際には日沒の名殘が薄いオレンヂ色を見せてゐた。その空を劃つてピラミット形の男体山のきれいな斜線の上に金色した大な星が一つ繪に描いた樣に輪廓がハッキリと煌いてゐた。

草原の中に出て急に幅廣く不規則になつた道の面にはそちこちに水溜が月を映してゐた。兩側は不規則乍ら所々耕して野菜らしいものが植付けてあつた。林の中に赤く灯をともしてゐる藁屋の窓が見える。何となく人里近くなつた樣な景色がなつかしかつた。

低い山々が眞黑く遠卷にしてゐた。すつかり昇りつめて今盆地の中央に湛へられた湖水へと急いでゐるのである——そういふ意識が樂しく胸を踊らせた。道は雜木林を出たり入つたりした。ふと行く手の林の細い幹の間に布を展けかけた樣な白いものが見え出した。瀧であらうか、但しは谷から湧昇る霧であらうか或は目的の湖だらうかと云ひ爭ひ乍ら近づくにつれチラ〳〵と月光を射返してゐる浪が見えて來た。風が出て細かくそよぐ樹葉の間から目覺める樣な赤い灯が一つ二つと見え出した。道が一曲りした拍子に灯の群が一時にパッと眼を射て表れた——遊覽地らしい街の灯の群が。

いかにせむ暮れゆく年をしるべにて
身を尋ねつゝ老は來にけり

三宮

人知れず暮れゆく年を惜むまに
春といふ名の立ちぬべきかな

藤原成道朝臣

國分寺まで

S. T.

「いいとこね、こゝは」。友は洋傘をすぼめた。何の木か枝の多い喬木が立ち並んでゐて、茂つた葉かげにおほはれて日の影もさゝず、冷々とする快さを貪つて私達が暫く休んでゐる間、小鳥の聲も聞えなかつた。木立を出て見ると、輕いめまひを覺えさせる樣な日の光が暖かに照つて、澄みきつた空には毛絲をほぐしたやうな白い雲が散らばつてゐた。少し行くと丹塗のはげかゝつた山門が見えて來た。深大寺である。石段の前の崖から二筋の小さな瀧が落ちて、きれいな小川になつて村を流れてゐる。崖の上には地藏尊が安置してあつた。人の有難がる水であらうが、私達はそれに手を浸したり、飲んだり、終には、ハンカチを濡したりして喜んだ。境内には珍らしい大木の木犀があつた。今が盛りで、どこからか見ても何ともいへず美しかつたあたりのものを醉はせる樣な香を放ち、落ち散つたその小さな花片は樹下を黃色く彩つてゐる。寺を辭して田圃道を歩いて街道へ出た。お祭と見えて軒毎に赤い提燈が吊られ、美しい花傘が風にまはつて居たが、人通りは少く遠くで太鼓の音がしてゐた。

府中の町に出るまでには、かなりの道程があつた、路傍は茅葺の家許りで、紫苑の植ゑられた垣根や、露草の叢咲いてゐる屋根や、初秋の村には何となく趣のある家が多かつた。生垣をめぐらした家や瓦屋根がふえて來たと思ふといつか府中の町に入つてゐた。大國魂神社は、老杉の茂つた、如何にも古さうなお社であつた。神主に乞うて座敷に案内せられ、そこでお辨當を食べた。庭石を蔽ふまで秋海棠の咲いてゐるのも嬉しかつた。そこを出て社の前の並木道を過ぎ、眞直に國分寺へ通ふ道を歩いていつた。